

厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

強迫性障害の認知行動療法の教育方法の確立とスーパービジョンの
方法論の開発に関する研究

研究分担者 中川彰子 千葉大学大学院医学院研究院子どもこころの発達研究センター 教授

研究要旨：強迫性障害に対する有効性が実証されている精神療法としては、認知行動療法が世界的に認められているが、その先進国である欧米においても、認知行動療法の治療者は絶対的に不足している。わが国でも本研究事業により、本疾患に対して統制群を置いた薬物療法との無作為効果比較試験が行われ、認知行動療法が薬物に比し有意に高い改善率を示したが（Nakatani, Nakagawa et al, 2005）、有用な治療を提供できる治療者数は少なく、この解決が急務である。そこで、本研究では、千葉大学で行われている認知行動療法の研修コースの参加者を対象に、強迫性障害の認知行動療法の治療者養成を目指して、スーパービジョンの方法を開発し、その効果を検証しながら工夫を重ね、

研究協力者

浅野憲一 千葉大学大学院医学院研究院
子どもこころの発達研究センター
助教

中谷江利子 若久病院 千葉大学非常勤講師
磯村香代子 カロリンスカ研究所
postdoctoral researcher 千葉大学非常勤
講師

知行動療法が治療の第一選択とされていることを知っているか、これまでの強迫性障害に対する認知行動療法の学習方法、今後も強迫性障害に対する認知行動療法を学びたいか、どのような方法で学びたいか、などであった。

C, D. 研究結果と考察：回答者の職種は主として臨床心理士（60%弱）、医師（25%程度）であった（Figure 1）。

A. 研究目的：

強迫性障害に対する精神療法として認知行動療法は、国際的に効果が認められており、我が国においてもその効果が示されている。一方で、強迫性障害に対して認知行動療法を提供する治療者は限られており、訓練システムも確立されていない。そこで本研究では強迫性障害に対する精神療法を行っているものを対象にアンケート調査を行い、訓練に対するニーズの把握を行い訓練プログラム開発のための基礎資料を収集することを目的とした。

B. 研究方法：

強迫性障害に対する治療を行っている専門家を対象にオンライン調査を行った。その結果、232名から回答を得た。質問内容は、職種、勤務領域、欧米で強迫性障害に対する認

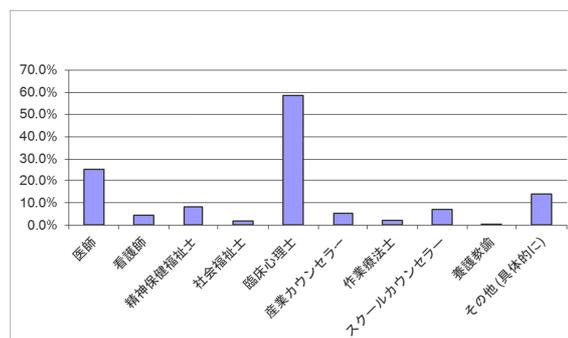


Figure 1 回答者の職種

また、勤務領域は医療分野が多くを占め、次いで教育分野が多かった（Figure 2）。

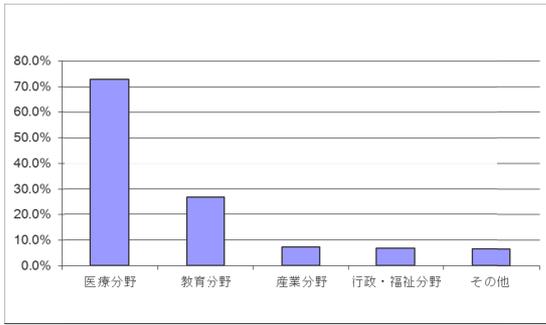


Figure 2 回答者の勤務する分野

回答者の92.2%が欧米において認知行動療法が強迫性障害に対する第一選択の治療であることを知っていた。

これまでの学習方法としては書籍での学習やワークショップ、講義、事例検討会などへの参加が多くみられた。一方で、スーパービジョンを受けた者は31%に、事例検討会で発表したものは26.7%にとどまっていた (Figure 3)。

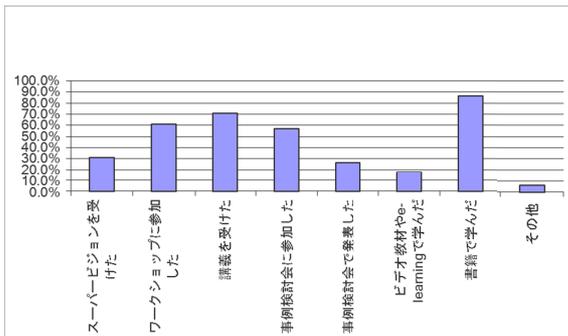


Figure 3 これまでの学習方法

また、回答者の98.7%が今後も強迫性障害に対する認知行動療法を学びたいと回答していた。その手段として70%近くの回答者が、スーパービジョン、ワークショップ、事例検討会への参加を希望していた。

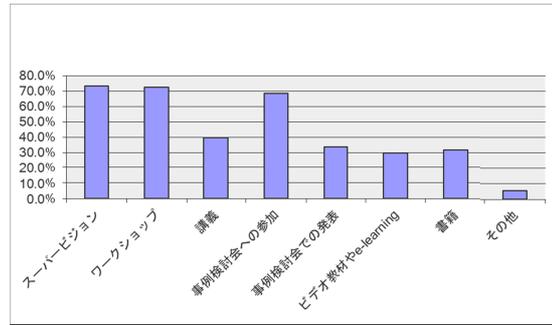


Figure 4 今後の訓練へのニーズ

E. 結論

本研究では強迫性障害治療に携わっている治療者に対して、アンケート調査を実施し、訓練及び学習についてのアンケートを実施した。回答者の多くは臨床心理士または医師であり、強迫性障害に対して精神療法を実施しているものの多くが臨床心理士または精神科医であると考えられる。

回答結果からは、強迫性障害に対する認知行動療法プログラムに対する高いニーズがうかがわれ、その内容としてはスーパービジョン、ワークショップ、事例検討会などが挙げられた。一方で、多くの治療者がこれまでの学習及び訓練として、ワークショップ参加、抗議、事例検討会への参加などを挙げていたが、自分自身の症例に関して指導を受けるとされるスーパービジョン、事例検討会での発表を挙げている割合は高くなかった。

我が国においても欧米と同様にランダム化比較試験などによって強迫性障害に対する認知行動療法の有効性が示されているが、その普及に必須と考えられる訓練プログラムの開発と検討はほとんどなされていない。本研究の結果をもとに治療者養成のための訓練プログラムを開発し、その効果を検証していくことが求められる。

G. 研究発表

1. 論文発表

Kayoko Isomura , Ashley E. Nordsletten, Christian Rück, Rickard Ljung Tord Ivarsson, Henrik Larsson, David Mataix-Cols : Pharmacoepidemiology of Obsessive-Compulsive Disorder: A Swedish Nationwide Cohort Study. European Neuropsychopharmacology, doi:10.1016/j.euroneuro.2016.02.004, Epub 9 February 2016

Asano, K., Ishimura, I., Abe, H., Nakazato, M., Nakagawa, A., & Shimizu, E. (2015). Cognitive Behavioral Therapy as the Basis for Preventive Intervention in a Sleep Health Program: A Quasi-Experimental Study of E-Mail Newsletters to College Students. Open Journal of Medical Psychology, 04(01), 9-16.

Asano, K., Isoda, H., Inoue, T., Sato, K., Asanuma, A., Oshima, F., ... Shimizu, E. (2015). A Pilot Study of Group Cognitive Behavioural Therapy for Depression in a Japanese Community. British Journal of Medicine & Medical Research, 10, 1-6.

Asano, K., Koike, H., Idoda, H., Inoue, T., Sato, K., Asanuma, A., ... Shimizu, E. (2015). Effect of Group Cognitive Behavioural Therapy with Compassion Training on Depression: A Study Protocol. British Journal of Medicine and Medical Research, 9(10), 1-5.

2. 学会発表

小林奈緒美、中川彰子、浅野憲一、亀口賢治、田中恒彦. 認知行動療法のスーパーヴィジョン(シンポジウム). 第41回日本認知・行動療法学会(仙台)

2015/10/2-10/4

Nakagawa A, Shimizu E, Setsu R, Oshima F. Assessment System for Adult Autism Spectrum Disorders with Secondary Psychiatric Disorders (Symposium). The 5th Asian Cognitive Behavior Therapy Conference (Nanjing, China), May, 2015
Tsuchiyagaito A, Koike H, Shimizu E, Nakagawa A. The Japanese version of the Obsessive-Compulsive Inventory-Revised (OCI-R): Factor Structure, Reliability, and Validity in a Sample of OCD Patients. The 22nd annual OCD conference, Westin Boston Waterfront, Boston, MA, 2015/7/31-8/2.